

の優劣、特に天台学の五時教判を前提とする両者の前後関係をめぐるものであったことを考えると、こうした点に触れることなく浄土教批判を構成したのは、意識的な方向転換であったと見ることが出来る。もともと、「人格」を焦点としたために、山川自身の企図するところとは異なり、親鸞・法然・日蓮のいづれを選ぶかは主観的な好みの問題と化しているように見える。

教義的な面で山川が強調するのは、親鸞・法然には現実社会、特に国家への関わりが無く、日蓮のみが現実社会に働きかけることができるという点である。

山川は、浄土教を「厭世教」・「単心靈」・消極的、日蓮の仏教を「革世教」・「心靈現実」・積極的といった性格づけをしている。こうした二分法は、現在でも日蓮信奉者の間に根強く残っていると思われるが、歴史的に見た場合、このような性格付けは近代特有のものと言わなければならない。特に問題になるのは、日蓮を「革世教」すなわち社会関与的・現実変革的と見なすことである。国柱会そのものは一種の「革世教」であったわけだが、自らの立場を日蓮その人に遡らせている面がある。日蓮が「革世教」であるという性格付けそのものが、国柱会ないし田中・山川らの思想の総体的な検討をもとに再検討される必要があるのではないか。山川の個々の論点とはかくとして、そうした近代的な日蓮像の枠組みそのものを再検討することが、近代日蓮主義を含む日蓮系思想の研究を深化する上で重要であろうと考える。

近代仏教と須弥山儀

——近代的自然観と仏教——

岡田正彦

梵暦運動は、江戸時代の仏教僧・普門円通(一七五四—一八三四)を開祖とする仏教系の思想運動である。幕末から明治初期にかけて、円通の体系化した「梵暦」と呼ばれる「仏教天文学」の理論をもとに、多くの門弟たちが各地で活発な活動を展開した。その運動の規模は、同時期の仏教系の思想運動では特筆すべきものである。

円通の門弟は、生前に千人を超えていたと言われているが、明治期以後は急速に衰えた運動の実態を把握する研究は少ない。本発表は、こうした梵暦研究の実態調査の一助として、各地に現存する須弥山儀(類)を調査した結果の報告である。

「須弥山儀」は、地球説と地動説を前提とする、西洋近代科学の自然観を論駁するために製作された、須弥山説にもとづく円盤状の世界像をモデル化した宇宙儀である。円通をはじめ、梵暦社中の人々が製作に関わった須弥山儀は、今も各地に現存している。しかし、従来の須弥山儀の研究は、和時計関係者による機械部分の調査が主であり、梵暦運動との関係を踏まえた様式研究はあまりなされていない。

円通没後に、梵暦運動は科学としての理論の整合性を重視する同四時派と、より宗教的結社の色彩が強い異四時派に二分化されることになる。全国各地に現存する須弥山儀の様式の多様性は、こうした梵暦運動の歴史的展開と深い関わりがある。

現存する「須弥山儀(類)」のなかで、最も古いのは「文政七年」の墨書きがある静岡・龍津寺所蔵の「須弥山器」である。これは、小出長十郎(円通の門弟の一人)の回想に語られている「須弥山器」とも年代は一致しており、円通本人が製作に関わった須弥山儀である可能性が高い。この須弥山儀は、天文学としての梵曆理論よりは、須弥界の实在をデモンストレーションすることを目的にしたモデルであった。

しかし、同四時派と異四時派の対立が激化し、円通説を教条的に擁護する異四時派の人々が、各地に「梵曆開祖之碑」を建立して師説を顕彰するようになると、円通説の改良を唱える同四時派の人々は、より精度の高い「Orrey(太陽系のシステムと諸星の動きを説明する宇宙儀)」のような須弥山儀を求めるようになる。この要請に応えたのが、当時の天才的技術者である田中久重であった。久重の須弥山儀を模倣して、以後は同四時説にもとづく須弥山儀が数多く制作されることになる。その後、異四時・同四時の矛盾を克服する新理論をデモンストレーションするモデルとして、「視実等象儀」が製作される。

つまり、須弥山儀製作の目的は、①梵曆理論のデモンストレーションから、②理論の精緻化、同四時・異四時の対立、さらには田中久重との出会いによって多数の須弥山儀が製作される一方で、異四時派の人々が各地に頌徳碑を建立して仏暦を頒布する時期を経て、③展象と縮象を統合する新理論のデモンストレーションに再び戻っていくのである。

従来の須弥山儀の調査に見られる混乱の原因の一つは、第一期の「須弥山器」から第二期の「須弥山儀」、さらには第三期

の「視実等象儀」へ、という須弥山儀の変遷とその意義が明確に理解されていなかったことだろう。

科学理論であるとともに宗教論でもあるという梵曆の二重性は、当初から梵曆運動を二分する傾向を孕んでいた。梵曆運動を全体的に捉えてその思想的な変遷を見通す視座がなくては、第一期から第三期までの須弥山儀の変遷を理解することは難しい。

天眼・肉眼の二分法から、縮象と展象の合致を目指す議論の深化、さらには「視実等象」の新理論の展開、という梵曆理論の変遷は、近代的自然観との出会いを通じて形成された近代宗教論の日本的展開を考えるうえで極めて貴重な事例を提供してくれている。今後は、さらに基本的な調査を進めていきたい。

近代仏教における世界観と社会観

——真宗僧佐田介石を中心として——

常塚 聡

本稿は、幕末から明治初期に活動した浄土真宗本願寺派の僧侶佐田介石(一八一八—一八八二)の言論における社会観の考察を通して、日本近代初期における西洋思想の流入によって思想界、宗教界に引き起こされた世界観の変遷について論じることを目的とする。

佐田の言論活動は、須弥山世界観に基づく天文学説に加え、国防の観点からの排耶(反キリスト教)論、および維新期の経